



## 共生のマダン、出会いのマダン

11月×日

会場に到着した。荷物を降ろす。さっそく炭をいこう。そうこうするうちにメンバーが集まってきた。誰も来なかつたらどうしようと思ったけど、ちょっと一安心。まずは肉の試し焼き。うん、今年のタレもうまくできている。

さあ、京都・在日外国人生徒交流会の一大イベント、東九条マダンの焼肉屋がはじまった。今年も焼いて焼いて焼きまくるぞ！ 25kgの肉を売り切らなくちゃ、来年の活動ができないもんね。

\* \* \*

京都では毎年11月3日に「東九条マダン」が開催されます。「マダン」は「広場」を意味する韓国朝鮮語です。しかし、単に土地としての広場を指すだけではなく、「人々が集まる場所」をも意味します。そして、このマダンを囲んで行う祭りのこととまた、「マダン」と呼ばれます。一方、「東九条」は京都駅の南東に位置する、京都一の在日朝鮮人集住地域です。ですから、「東九条マダン」は、東九条地域で行われる朝鮮風のお祭りということになります。

ところで、東九条は在日朝鮮人が集住しているとはいえ、それは周辺地域に比べて比率が高いというだけのことです。東九条にはたくさんの日本人が住んでおられるし、集住地域であるがゆえの厳しい差別もあります。こうしたなかで、東九条マダンは、1993年にはじめて開催されました。

東九条マダンの特徴は、単に民族文化をとりもどすというだけではなく、日本人との共生をめざすことも、その目的としたことです。といっても、その道のりは平坦なものではありませんでした。チャンゴ<sup>注1</sup>の練習のために学校のグラウンドの使用許可を求めて、PTAから反対される。あるいは、地域の公園で子どもたちがソゴ<sup>注2</sup>の練習をしていると、石が飛んできたこと也有ったと聞きます。それでもあきらめずに続けてこられた結果、今や夏頃になると、東九条のあちこちに東九条マダン

のポスターが見られるようになりました。

わたしも世話をしている「京都・在日外国人生徒交流会」は、1995年に開催された第3回東九条マダンから焼肉屋を出しています。わたしたちの交流会は、どこかの組織に所属しているわけではありません。活動資金はすべて引率者のカンパです。もちろんそれだけでは足りません。そこで、「焼肉を売って活動資金を稼ごう！」ということになりました。どうせならおいしく肉を食べてほしいので、タレやキムチは手づくりにしました。当日は、声をからして「お肉、どうですか～！」と呼び続けます。それでも終わったあとは、卒業生の引率のもと、カラオケで打ち上げです。「はい、カラオケ代」とお金を渡すと、自分たちで稼いだお金なのに「ありがとう」という言葉が返ってきます。子どもたちは自分たちの力で活動資金をつくることに誇りを感じてくれています。

一方、わたしたちにとって焼肉屋を出す意味はそれだけではありません。先日、日本海側の高校の教員から「外国人のことを学びたいという生徒がいる。東九条マダンに行かせていいか？」と聞かれました。わたしは「その子に焼肉屋を手伝わせて下さい」と答えました。当日来たその生徒さんは、肉を焼きながら売りながら、たくさんの在日朝鮮人の高校生や大人たちと話をしていました。きっと、わたしたちの焼肉屋もまた、ひとつのマダンなんだと思います。

もちろん、いつもたくさんの生徒でにぎわうわけではありません。生徒は誰も来ず、教員と卒業生だけで焼肉屋をやったこともあります。でも、「こんな時もある」と思いながらも續ければ、必ずまた誰かが来るということ、そしてそこが豊かな出会いの場となることを、わたしたちは経験的に知っています。だからこそ、東九条マダンの存在に感謝しつつ、わたしたちにとっての「マダン」を、きっと来年もやることでしょう。ちょっと疲れてはいるんですけどね。（高校教員 土肥いつき）

注1 鼓のような形の朝鮮の太鼓

注2 デンデン太鼓のような形の朝鮮の太鼓